

鎌倉市山崎・北野神社応永十二年銘宝篋印塔の再検討

鈴木 弘太（文化財課技術職員）

はじめに

本稿で検討する北野神社応永十二年銘宝篋印塔は、鎌倉市山崎の天神山と呼ばれる丘陵の山上の北野神社境内に所在する（図1、写真1）。相輪を欠損するが、保存状態は良好である。応永十二年（1405）八月二十五日の紀年銘を有し、昭和36年11月15日に鎌倉市指定文化財（建造物）に指定されている。

これまで、鎌倉市教育委員会や国宝館の刊行物を中心に、この塔の解説がなされてきた。ただし、それらとは異なる解説文も存在するため、本稿で改めて確認する。具体的には塔身の四面に彫刻される尊像は金剛界四仏か、顕教四仏か、である。

1. 研究略史と問題の所在

この塔の最初の解説は、跡部直治による「鎌倉の宝篋印塔（3）」であろう。跡部は、塔身の尊像について舟形後光の龕中に陽刻される稀有なものであるとし、銘文よりこの塔がもともとこの地（鎌倉市山崎）あったことを指摘している。また塔身四面に彫像される四仏については、定印を結ぶ弥陀と釈迦、薬壺を持つ薬師は疑いが無いとするが、合掌する弥勒に疑義を示しながらも、顕教四仏であることを述べている（跡部 1928）。同様の見解は『仏教考古学講座 第2巻 塔婆編』でも示されており、その前提として「塔形の一般化するにつれて、在来の像設を自己の為楽に改変しあるいは各宗旨に適応せしめた一類なども次第に出現した」としている（跡部 1970）

この北野神社宝篋印塔は昭和36年（1961）に鎌倉市指定文化財に指定されており、その解説は『鎌倉の文化財 第1集』に掲載されている（鎌倉市教委 1972）。概要は次の通りである。「年代 応永十二年（1405・室町時代）/材質 安山岩製/寸法 総高 158.7 cm/所在地及び所有者 山崎 736 番地 北野神社（山崎天神）/指定 昭和36年11月15日/相輪上半分を失ってはいるがよく整った宝篋印塔である。

（中略）塔身は輪郭をめぐらし舟形に彫りくぼめた中に蓮座上に坐した仏の像を浮き彫りしている。これは金剛界四仏を尊形で表現したもので珍しいものである。（中略）銘文は風化のため読めない部分があるが、山崎住の教恩なるものが天長地久、国治民安、現世安穩、来世極樂を願って法華經を書き写して埋め、この塔を建てたというもののようである。」とあり、跡部の見解とは異なり、塔身の尊像は金剛界四仏であると記されている。

この部分について『鎌倉市史 考古編』では、「塔身は輪郭をめぐらし、四方に蓮座上に安住する仏の坐像を、舟形に彫りくぼめた中に浮彫りにしている。これは金剛界四仏を尊形で表現したもので珍しいものである。」とされている（赤星 1972〔初出 1959〕）。

その後に刊行された、鎌倉国宝館図録では「室町期の特色を備え、よく整った宝篋印塔である。」と評価されており、尊像については「輪郭をめぐらした塔身には、舟形に彫りくぼめた中に金剛界四仏の尊像を浮彫りにしている」とされており、『鎌倉の文化財』や『鎌倉市史』と同様である（三浦 2002〔初

出 1978])。

この塔の図面が提示されたのは、管見の限り、斉木勝「関東形式宝篋印塔の研究」が初見である(斉木 1986)。斉木は塔の概要とともに、鎌倉国宝館図録に載る銘文の翻刻を引用するが、塔身四仏の尊名については触れていない。

さらにその斉木の図をもとに相輪を補ったのが本間岳人である(本間 2012)。本間は南関東の安山岩製石塔、特に五輪塔と宝篋印塔の集成を行い、分類及び編年を提示している。本塔に関していえば、本間Ⅲ期(14世紀中葉から15世紀前葉)に位置付けられている。当該期は安山岩製宝篋印塔の生産と流通の隆盛期であり、また製品の斉一性が高くなる時期であるという。論旨の性格上、個々の解説はないものの、本塔の位置付けがなされた貴重な成果である。

少し毛色が変わるが『新板改訂 鎌倉観光文化検定 公式テキストブック』では、「1405年(応永十二)造の、四方に薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来、弥勒菩薩が彫られた宝篋印塔は市指定文化財」とあり、顕教四仏であることが解説されている(鎌倉商工会議所監修 2018)。

このように、本塔は室町期の規格性の高い宝篋印塔であり、紀年銘や銘文から当初から鎌倉山崎の地にある、地理的、年代的に定点となる資料であることは明らかである。ただし、その塔身に刻まれた尊像については、鎌倉市が刊行する解説では金剛界四仏、それ以外では顕教四仏と錯誤がある。

2. 本塔の概要

尊像の検討に入る前に、塔の概要を述べる(写真1～3、図2)。

北野神社社殿の左手、平場の南端に位置する。平場造成時の段切り上の裾に位置し、反花座の下には岩盤が露出していた。反花座、基礎、塔身、笠、相輪がそれぞれ別材で作られている。笠と相輪以外の接合方法は観察することができなかった。残存高は157.5cm、石質は安山岩である。

反花座は幅66cm、高さ38.5cm、二区に分かれる輪郭を有する。反花は重弁で四隅をまたいで、その内に二葉を配する。なお一葉の幅は15cmである。框の幅は、左右端は4.5cm、上は3cm、下はやや剥落が進んでいるものの2.5cm程度で、中央は5cmである。輪郭の内寸は左右ともに幅26cmで、高さは18cmである。この基礎の2面に銘文が刻まれている。現状では判読できないが、国宝館図録では「本州山崎□主/教音□久起造/大□□□□□/祖者□勝□/□□天神靈^(神)□/此時□進石浮/図□□□□書/写□□□妙典/夫作善^(德)□旨者/天長地久国治/民安□□□世/界無主□魂俱/沐余□同起□海/□応永十二稔乙酉八月二十五日/信士教音敬白」と読んでいる(三浦 2002)。

基礎は二区に分かれる輪郭を持ち、幅43cm、高さは26cm、輪郭の内寸は左右とも、幅14cm、高さ17.5cm。基礎上に二段の階段を有する。階段下段の幅は35cm、高さ5cm、上段は幅28.5cm、高さ5cmである。

塔身は幅25cm、高さ24cm、輪郭の内寸は幅17.8cm、高さ18.6cmである。尊像については、次章に詳述する。

笠は下に二段、上に五段の階段を有し、同石の隅飾りを有し、笠最上部から納入孔が穿たれている。軒の最大幅は48.5cm、高さ5cm、軒下は二段の階段状とし、下一段目の幅28.2cm、高さ5cm、二段目

は幅 36.5 cm、高さ 5.5 cm である。軒上は五段の階段状で、最上段は露盤となる。下から幅 38 cm、35 cm、32 cm、24.5 cm、20.5 cm であり、高さは下から 4.5 cm、3.7 cm、4 cm、3.4 cm、6.7 cm である。露盤は輪郭が廻り 2 区に分かれる、内寸は幅 6.5 cm、高さ 3 cm である。隅飾りは幅 15 cm、残存高 12 cm で内側は瘤状である。一重の輪郭を持ち、わずかに外反する。納入孔は径 16 cm の円形で、深さは 14 cm である。納入品の痕跡は確認できなかった。

相輪は、ほぞ部、伏鉢、受花、九輪の一部が残存する。残存高 21 cm で、伏鉢は高さ 11 cm、受花は複弁で高さ 7.2 cm、主弁の幅は 11 cm である。

3. 塔身の尊像

これこそが本稿の趣旨である。先学の指摘を再度振り返ってみよう。この四仏を金剛界四仏であるとしたのは、『鎌倉の文化財 第 1 集』（鎌倉市教育委員会 1972）及び『鎌倉市史 考古編』（赤星 1972〔初出 1959〕）、『鎌倉国宝館図録第 22 集 鎌倉の宝篋印塔』（三浦 2002〔初出 1978〕）である。対して顕教四仏であるとしたのは、『史跡名勝天然記念物』3 集 11 号（跡部 1928）、『仏教考古学講座第 2 巻』（跡部 1970）及び『新板改訂 鎌倉観光文化検定 公式テキストブック』（鎌倉商工会議所監修 2018）である。

金剛界四仏であれば、北に不空成就如来、東に阿閼如来、南に宝生如来、西に阿弥陀如来が配される。顕教四仏であれば北に弥勒如来、東に薬師如来、南に釈迦如来、西に阿弥陀如来である。

写真 3 は北野神社応永十二年銘宝篋印塔の塔身に刻まれる四仏である。塔身は方形の枠で縁取られ、その中に龕状の舟形光背を持つ坐像が浮き彫りにされている。坐像は蓮台に結跏趺坐で座す。すべて通肩とみられる。蓮台には単弁の連弁が線刻で表現され、北、西、南面は 7 枚、東面は 5 枚が確認できる。現北面の尊像の総高は 16.5 cm、像高は 13 cm、膝張 17.5 cm、肩幅 12 cm、面長 4.3 cm、面幅 3.2 cm であり、他の像もおおむね同様の大きさである。

1 は現北面の尊像で、現在の正面である。尊像は両手で正面に薬壺を持つ。2 は現東面の尊像で定印を結ぶ。3 は現西面の尊像で合掌である。4 は現南面の尊像でこれも定印を結ぶ。このうち 1 の薬壺を持つ尊像は薬師で間違いないだろう。また定印の二尊は阿弥陀及び釈迦であり、2 が釈迦、4 が阿弥陀である。3 の合掌手の尊像は弥勒としてよいだろう。本来であれば、現西面の合掌手の弥勒如来（3）が北方仏であり、現北面の薬師如来（1）が東方仏であり、現東面の釈迦如来（2）が南方仏で、現南面の阿弥陀如来（4）が西方仏である。方角と尊名とを合致させるのであれば、塔身を逆時計回りに 90 度回転させればよい。

以上のことから、鎌倉市山崎・北野神社に所在する応永十二年銘宝篋印塔の塔身に刻まれる尊像は、顕教四仏としてよいだろう。

おわりに 一応永十二年銘宝篋印塔と宝積寺

上に見てきたように、本稿では鎌倉市山崎・北野神社応永十二年銘宝篋印塔の塔身に彫られた尊像は、顕教四仏であると結論付けた。1 世紀近くも前の跡部の見解を追認したことになる。

ところで北野神社は、もとは宝積寺の鎮守であったとの伝承がある。宝積寺の開山は夢窓疎石とも方外宏遠ともいわれ、少なくとも南北朝期ごろには創建していたようである。『空華日用工夫略集』では貞治六年（1367）に義堂周信が一時当寺に隠れたことが記されており、また応安七年（1374）には、円覚寺長老大法大闡が匿われている。廃絶年代は明らかではないが、文亀元年（1501）に没した長尾忠景の書状に登場するため、そのころまでは存続していたと推定されている（貫・川副 1980）。

近年、その宝積寺跡の推定範囲内で発掘調査が行われた（武相文化財研究所 2019）。調査では主に弥生から近世に至る複合遺跡が発見され、丘陵上を段切造成され、各時代の遺構が発見されている。中でも9世紀代と推定される瓦塔の破片が数多く出土しており、当地での宗教拠点を示唆された。また中世では15～16世紀の土坑墓19基が確認され、墓域であったことが明らかとなった。また段切り造成された平場には、2基の火葬場址とともに原位置を留めていると思われる五輪塔部材が発見された。これらの要素から宝積寺の境内地あるいはその周辺であることが予想される。今後当地域の一体的な歴史景観を考える必要があるだろう。

付記

本稿の執筆にあたり、菊地晋介氏及び小川壽一氏には、現地調査及び本紙への掲載を許可いただいた。現地調査に際しては、高井久雄氏、箱崎英里子氏の助力を賜った。さらに本間岳人氏には先行研究の教示と図面データの提供を受けた。また石井千紘氏、古田土俊一氏にも協力と指導を得た。記して感謝申し上げる。

参考文献

- 赤星直忠 1972 『鎌倉市史 考古篇』 吉川弘文館（初版は1959年）
- 磯部淳一 2020 「北野神社宝篋印塔」『東国の中世石塔』 吉川弘文館
- 跡部直治 1928 「鎌倉の宝篋印塔（3）」『史跡名勝天然記念物』 3集 11号
- 跡部直治 1970 「宝篋印塔」『仏教考古学講座 第2巻 塔婆篇』 雄山閣
- 鎌倉市教育委員会 1972 「3 建造物 石造宝篋印塔（応永十二年銘）」『鎌倉の文化財 第1集』
- 鎌倉商工会議所監修 2018 『新版改訂 鎌倉観光文化検定 公式テキストブック』 かまくら春秋社
- 斉木勝 1986 「関東型式宝篋印塔の研究」『千葉県文化財センター研究紀要 10—10周年記念論集—』 財団法人 千葉県文化財センター
- 関忠夫 1987 「石造建造物」『鎌倉市文化財総合目録—建造物篇—』 鎌倉市
- 貫達人・川副武胤 1980 『鎌倉廃寺辞典』 有隣堂
- 武相文化財研究所 2019 『神奈川県鎌倉市宝積寺跡・天神山下城遺跡』
- 本間岳人 2012 「南関東」『中世石塔の考古学—五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布—』 高志書院
- 三浦勝男 2002 「15 市指定文化財 北野神社応永十二年銘塔 一基」『鎌倉国宝館図録第22集 鎌倉の宝篋印塔』（初版は1978年）



図1 鎌倉市山崎・北野神社位置図（国土地理院地図を改変）



写真1 現況写真（右が北野神社社殿、左が宝篋印塔）



写真2 鎌倉市山崎・北野神社応永十二年銘宝篋印塔（市指定有形文化財）



1 北面（現正面）



2 東面



3 西面



4 南面

写真3 塔身の四仏

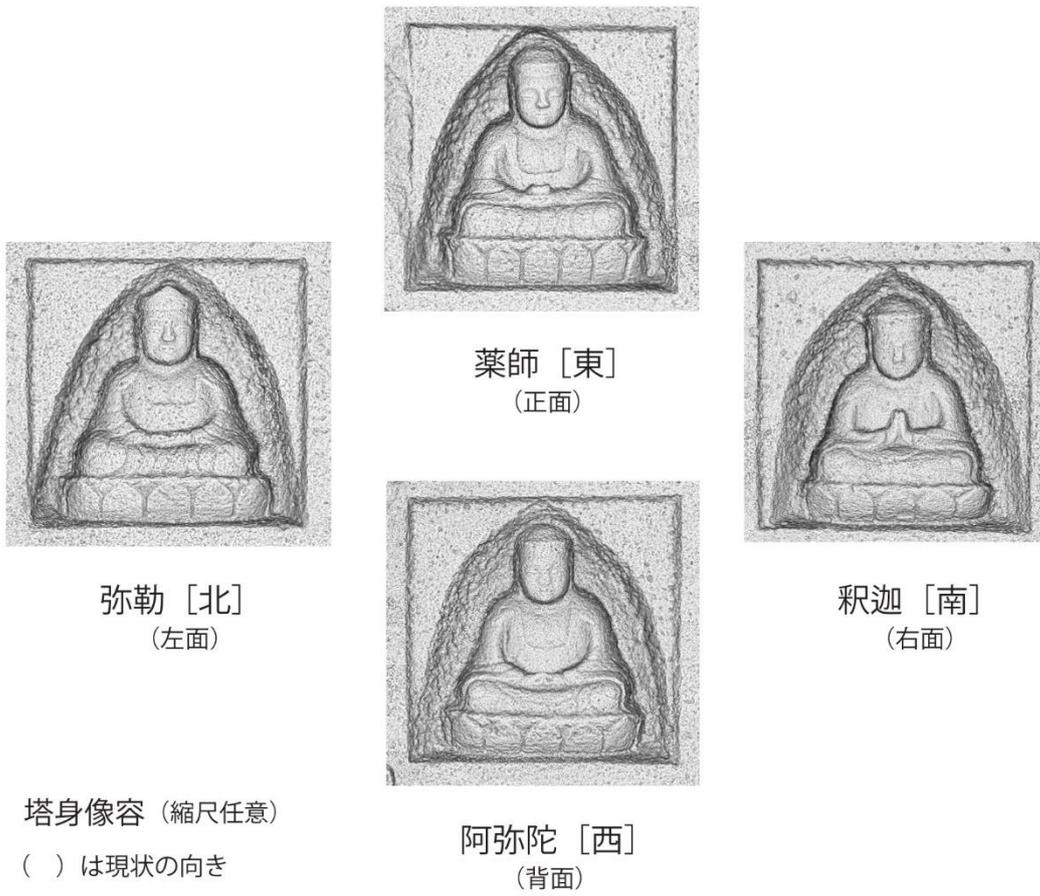
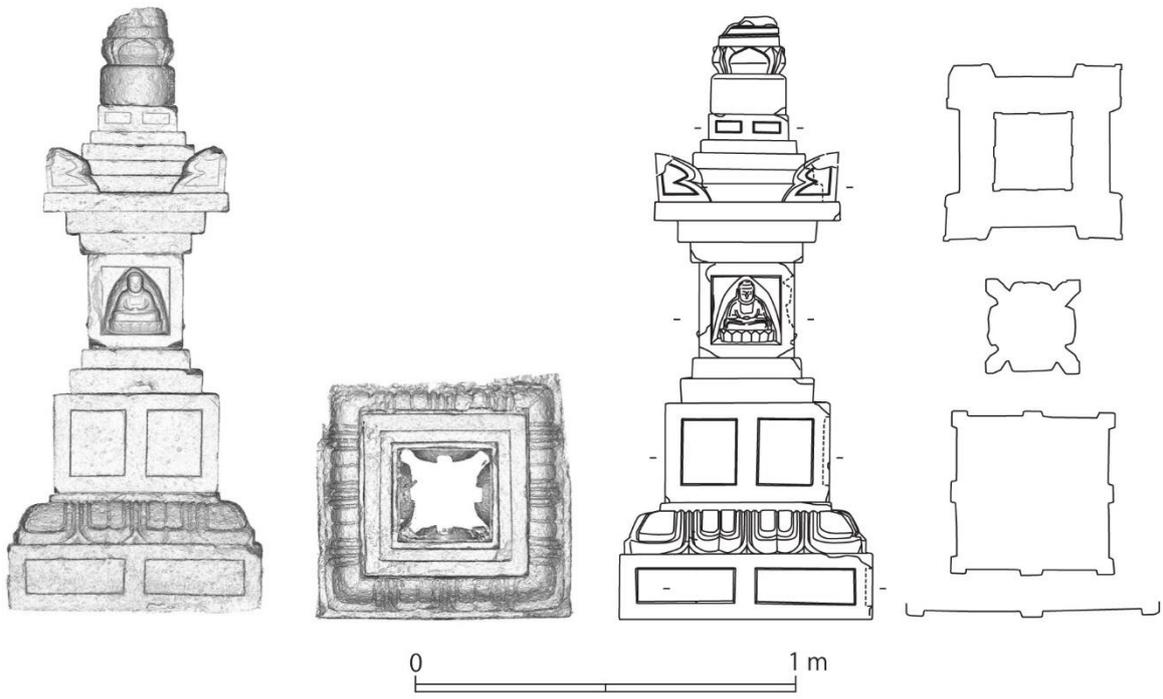


図2 三次元計測図 (本間岳人氏提供)